

神奈川県の高大連携講座のこれまでとこれから

湘南高校 中山拓憲

はじめに～高大連携講座の概要

神奈川県では、例年、県内の高等学校を会場としてお借りし、生徒向けの夏季講座である「高大連携講座の試み」（以下、高大連携講座）を行っている。2007年から昨年まで12回行っているこの講座であるが、委員長報告の欄にも書かせていただいたが、今年度は中止させていただいた。例年であれば、この『歴史分科会研究報告』（以下『研究報告』）に高大連携講座の報告をさせていただいている。今年度は、7月に行われた高大連携歴史教育研究会の大会でこの講座について発表させて戴き、様々高大連携講座を振り返る機会も頂けたので、本講座が継続できた理由と、今後さらに継続・発展していく上での課題について考えてみたい。また今後よりよい会を作っていくための議論のたたき台となれば幸いである。

1 神奈川県「高大連携の試み」の概要

高大連携講座は、毎年、夏季休業中の7月下旬から8月上旬の3日間に神奈川県内の高等学校を借りて行われている。3日間開催で、午前中は、高校教員60分、大学教員90分で、共通のテーマで高校生向けに授業を行う。午後には高校・大学教員による研究協議を行っている。毎年、共通の大テーマがあり、2017年「近世のヨーロッパ」2018年「近代のヨーロッパ」2019年「現代のヨーロッパ」と時代・地域を決めて行っている。2016年まではアジアを扱い、2017年以降はヨーロッパを扱っている。さらに各日で、2019年は「現代の北欧」「現代の中東欧」「現代のドイツ」など地域を絞ったテーマを設定する。高校生対象の授業であるが、県内、県外の高校教員、大学関係者なども見学する。午後は生徒・教員が書いた質問への質疑応答や、それを土台にした討論を中心とする高大の教員の研究協議が行われる。2019年度の研究協議では教員がグループ学習を行った。

2 高大連携講座のあゆみ

この項では、高大連携講座の歴史を振り返りたい。以前の『研究報告』をみると、詳細に当時の様子が伺える。高大連携講座が始まるまでには、大きく2つの流れがあった。1つは神奈川の世界史教員が行っていた夏期講習会、もう一つが大阪大学で行っていた『大阪大学21世紀COEプログラム』である。2001年頃、本県の世界史研究推進委員会の先生方は生徒向けの夏期講習会を行うようになった。この講習会は主に受験生向けにテーマを決めて行うもので2007年まで続いた。例えば2004年は「モノを切り口とした世界史」「イスラーム史」、2005年は「交流の世界史」「戦後史」をテーマとし、イスラーム史であれば「イスラームの広がり」から現代までイスラームの歴史が一通り学べる内容となっていた。「モノ」や「交流」は今では主流になっているが、当時はかなり先駆的な内容であったと考えられる。約1週間の日程で約10人の先生方が次々授業を行った。もう一方の「大阪大学21世紀COEプログラム全国高等学校世界史教員研修会」は2003年から4回に渡って、「研究成果を高校の教育現場に伝えよう」という大阪大学史学科の先生方の強い意志のもと旅費も宿泊費も大学側が負担して行われた。全国の高校教員を集めて大阪大学の先生方が高校世界史に関わる最新の研究成果を講義するという意欲的な試みであった。われわれ神奈川県世界史研究推進委員会では最新の歴史学の研究成果を教材化しようという意識をもち続けているが、大阪大学の企画は当時の先生方が待ち望んだものであったと考えられる。その一つの表れとして、2005年、2006年に行われた、小林克則先生(厚木商業(当時))が『世界史における旧説と誤解』という報告が挙げられる。最新の研究成果と比較して、世界史教員の間で通説となっていることの誤りを正す内容になっていた。

この流れを受けて「高大連携の試み」が始まる訳だが、その前年には高大連携講座のプロトタイプとなる企画が行われている。2006年に、外語短大付属高校で行われた夏期講習会には大阪大学の桃木至朗先生が招かれ高校生相手に授業を行っている。2005年のCOEに参加した石橋先生がお願いして実現した。

「COE」の終了を受けて、これを引き継ぐ形で、神奈川県社会科部会歴史分科会・大阪大学歴史教育研究会の共催で2007年に「高大連携の試み」が「東アジア・東南アジア世界をどう教えるか」をテーマに始まった。第一回から、午前授業、午後協議という形で行われており、大枠は現在も変わっていない。「COE」の「研究成果を高校の教育現場に伝えよう」という意思を受けつつも、神奈川の先生方が主体的に行ってきた夏期講習会の形が土台になる。私が先輩方や桃木先生に繰り返し言われたのは神奈川の高大理学講座はあくまで高校教員が主体となっていて行われているということだ。神奈川県の高校生に良い歴史の授業を届けるために高大連携講座が行われている。「COE」の意思も実現している。

この取り組みの一つの成果が2008年に出版された歴史分科会『世界史をどう教えるか—歴史学の進展と教科書—』である。当時とその30年前の教科書を比較し、その間の記述の変化を記し、さらに最新の研究成果にも言及するという意欲的な著作である。私自身が神奈川の教員となった理由の一つはこの本と教員採用試験の勉強中に出会えたことで、執筆者たちにいずれ会いたらありがたいと考えた。その私が、執筆者と仕事をし、この報告を書けるのは本当に幸せなことである。また2008年には大阪大学の秋田茂先生を中心メンバーとしてAAWH（アジア世界史学会）が設立されており、そこでも複数回に渡り本委員会のメンバーが、国内外の大学の先生方の協力を得、本県の高大理学講座の成果を報告している。

高大連携講座は、様々な形を試行錯誤してきたが、2009年に3日間に定まり、全体テーマが時期と地域から構成される「19世紀アジア」となり、高校教員が50分（現在は60分）、大学教員が90分の授業をするというほぼ大枠が作られた。2009年であれば大学、高校とも日本史の教員が講師に招かれるなど、内容についての意欲的な試みは続いた。2013年には全国歴史教育研究協議会（全歴研）神奈川大会が行われた。全分科会で大学の先生方を共同研究員として招くという試みを行い、この大会を「高大連携の場」とした。高大連携講座で講演頂いた先生方の協力を得た。記念講演は高大連携講座に第1回からの講師である桃木先生にお願いした。まさしく本県の高大理学講座の成果を全国に発信する機会となった。桃木先生は2016年以降、講師を若手に譲った後も、コーディネーターとして全体の方向性や講師の相談に乗っていただいている。桃木先生の発案もあって、現在はヨーロッパ史を行っており、そこでは大阪大学の古谷大輔先生に講師とコーディネーターをお願いしているが、桃木先生にもコーディネーターをお願いし、より広い視野での講座が実現している。

3 高大連携講座の特徴と継続の理由～2019年度を例に

前節で高大連携講座の歴史を振り返ったが、ここではこの講座が継続している理由を考えたい。桃木先生、古谷先生など大学の先生方や、県内はもちろん県外の高校の先生方の協力・応援も大きい。忙しい中、遠方からも、継続して参加していただき、刺激的な講演をしていただいたり、研究協議において刺激的な発言を頂いたり、会を盛り上げていただいている。

また、運営面での支援も大きい。県教育委員会との共催という形で開催しており、そのため県内の先生方は出張扱いで参加でき、会場も各高校から無料で貸していただいている。またNPO 神奈川歴史教育研究会からの様々な支援も受けている。様々な先生方が県外でも宣伝してくださっている。そのおかげで、例えば2016年であれば3日間で延べ生徒が260人、県内教員が106人、県外教員が21人、大学・教育関係者が14人と、合計で401人、1日平均で133人の参加を得ている。

もちろん内容の質と独自性が評価されているという面もあるのだろう。当講座の特徴を挙げれば「高大の連携」が企画内容にまで及んでいる。高大の教員は同じテーマで授業をし、事前に何度も渡り打ち合わせを行う。両者の授業が有機的に組み合わせり効果が高まるように内容を互いに検討している。高大の教員の役割分担は一様でないが、例えば、高校教員は高校世界史の基本的な内容・受験対策を扱い、大学教員はさらに掘り下げた内容を扱う。教科書記述や入試問題に関わる話もされる。一緒に授業を作ったという高大の講師間での仲間意識が生まれると同時に、授業に参加した生徒や高校教員の間にも同じ空間を共有した思いが共有されている。

2019年の授業内容を具体的に見てみよう（詳しくは2019年『研究報告』をご覧ください）。初日の8月8日は戦間期のドイツがテーマであった。高校側からは徳原先生が、生徒は座ったままICT機器を用いて行う、双方向の授業であった。生徒は資料や教科書の文を比較して考える課題に取り組み、彼らの答えや意見を前方スライドに映し出すことで双方向の授業を行った。徳原先生の授業で課題意識を高めた生徒に大学側の小野寺先生（東京外語大学）はナチスがどのように大衆を動員していったかを解明する授業をおこなった。ナチ党支配下のドイツが95%の「普通の人」にとっては良い政権であり、それが支配を支えたという構造が衝撃であった。8月10日は戦間期中東欧が扱われた。高校側の牧野先生には静岡から来ていただいた。「なぜ「民族自決」で生まれ変わった中東欧は、ドイツに抵抗できなかったのか」という問を設定して知識構成ジグソー法を用いて中東欧の国の状況を経済・政治など様々な面から考えさせる授業であった。生徒が主体的に取り組む工夫がされていたこともとり上げたい。大学側の中澤先生は第一次世界大戦前から1939年までのスロヴァキアの歴史を講義された。東ヨーロッパに適用された「民族自決」の中身について考える授業であった。チェコスロヴァキアと言う国において、スロヴァキアに民族自決権はなく、彼らが独立に向かう様子が描かれた。まさしく「民族自決」が多面的に考えられる授業であった。この2日間では、高校教員の授業において、生徒はテーマについての課題意識が高められ、大学側の授業では、課題の本質を探究するような授業が展開された。深い関心を持って授業を受け、より理解が深まったと考えられる。

また8月9日は戦間期の北欧が扱われた。高校側の福本先生（栄光学園）は、戦間期の北欧にとどまらず幅広い範囲の基礎的な知識を凝縮した授業を行った。さすが栄光学園の先生だと感じる情報の取捨選択に優れた授業であった。その基礎を土台に、大学側の古谷先生（大阪大学）は、第一次世界大戦後のスウェーデンにおける福祉国家の形成についての内容を扱った。「なぞかけ」の形を用いて三段論法で話が展開された。大衆化の時代における福祉国家は断種法なども生み出し全体主義にも相通じる点もあったというその功罪が述べられた。

3日間で大衆化の時代のヨーロッパについて、北欧や中東欧といった授業で扱いづらい地域を扱い、多角的にヨーロッパを捉えられる充実した時間になったのではないかと。授業後に設けている質問時間では生徒が次々と挙手をして、講師に鋭い質問をぶつけた。これは生徒も素晴らしいが、生徒の課題意識を高める授業が行われている証拠でもある。最新の研究が生徒の心の響くことが確認できる場となっている。

もう一つの継続の理由として午後の研究協議をあげたい。午前の授業の参加者には感想・意見と質問を書いてもらう。その質問に対して講師たちが答えていく。過去の『研究報告』を見ると、質問が止まらず、時間延長し、懇親会でも質疑応答が続いたこともある。研究協議については「講義では聞けなかった内容が聞ける。」「他の教員の質問を通じて「気づいていない視点・疑問」までに気づける。他校の状況がわかる。」などの意見がアンケートでいただいた。

4 現状の課題～新学習指導要領との関連を考えて

われわれ神奈川の世界史研究推進委員会は、大阪大学の「COE」プログラムの「(歴史学の)研究成果を高校の教育現場に伝えよう」という意思を引き継いで、「(教師が)歴史について何を教えるか」を考え本講座に取り組んできた。最近「(生徒が)歴史をどのように学ぶか」という方法論の重要性が強調されるようになってきていることを受け、本講座においてどのように対応するかが課題となっている。桃木先生、古谷先生とも歴史教育の方法論についても様々考え発言されており、環境は整っている。

本講座における「どのように学ぶか」という視点は、各先生方が取り入れている。例えば2019年は双方向的な学習が高校側の授業では行われている。受験生が参加している現状から、双方向の授業と入試対応の両立が必要である。思考力が求められる共通テストや大阪大学の入試はありがたい。

また、午後の研究協議において始めたのが、教員によるグループ学習である。午前の授業、午後の質疑応答での知識を用いて、授業で使える「問い」を考え、グループごとに発表する試みを行った。それに対して授業者からのコメントを頂いた。このねらいをまとめると以下のとおりである。

- ①今後の学習指導要領で求められる主体的・対話的・深い学びを、まず教員が体験する。
- ②本講座で学んだことを、授業で使える形にして帰る。(研究を教育現場へ)
- ③高校教員の授業の作り方を大学教員に示す。大学教員へのフィードバック。
- ④思考や表現のために、豊かな知識(午前の授業、午後の質疑応答)が役に立つことを実感する。
- ⑤面白い話を聞いた後はそれを他の人と話すのは楽しい。他校の教員とも知り合う機会になる。

アンケート等から反応を見る限りは、ある程度うまくいったように感じる。ただし、当然に様々な改善が必要である。今後、より良い形を探っていきたい。その他の課題としては、講座の内容や質問内容、講師のジェンダーバランスなどの問題もあるが、その点についても改善していきたい。

おわりに

以上、神奈川県の高大連携について述べてきた。校務が忙しい中、運営に関わってくださっている世界史研究推進委員の先生方、そしてここまで築いてきた先輩方のおかげである。現在の委員長としてお礼を申し上げたい。今後とも様々な先生方に参加していただき意見・感想を頂き、発展させていきたい。今年度は「現代のヨーロッパをどのように学ぶか2」という戦後のヨーロッパ史をテーマとして開催する予定である。「歴史総合」の「グローバル化とわたしたち」に相当する時代が、みっちり学ぶ時間になる。是非多くの先生方、生徒の皆さんの参加をお待ちしております。

《参考文献》

- 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編著『歴史分科会研究報告(第31号～第48号)』2002～2019
- 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編著『世界史をどう教えるか—歴史学の進展と教科書』山川出版社、2008
- 澤野理「アジア世界学会第二回大会参加記」『歴史と地理 no659 世界史の研究 233』山川出版社 2012
- 中山拓憲「神奈川県における高大連携と授業実践—研究と授業をつなぐ試み」『歴史と地理 no704 世界史の研究 251』山川出版社 2017
- 中山拓憲「神奈川県の高大連携講座と新しい取り組み」『歴史学研究月報 no719』歴史学研究会 2019
- 桃木至朗『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史』大阪大学出版会 2008
- 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』東洋館出版社 2019